

玉川人物伝 ①

ふるさとと伝承便り

みんなで、多くの人がある
“桜の名所たまかわ”を創りたい。

春、桜の咲く季節がやってくる
と吉村さんの季節もやってきます。

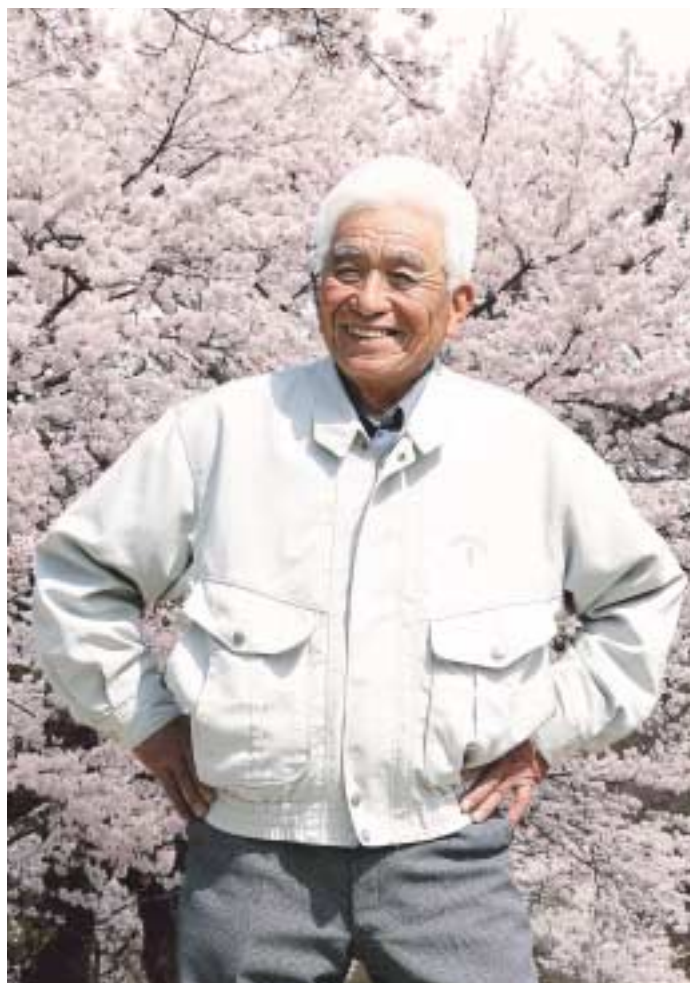
「自分もそうだが他所に旅行するばかり。逆に村内に多くの人が来てほしいと思った」と昭和47年4月の玉川村桜愛好会が発足した
当時は振り返る吉村さんは、発足
当時から今も玉川村桜愛好会の会
長を務めています。

「この地域には意外と桜の巨木
が点在し、山にも数多くの桜が自
生しており、山には自由民権運動
にゆかりの史跡もある。遊歩道や
公園を整備し、桜の名所にしたい」という強い思いが、吉村さんと会
員30人の心を一つにし、山桜の保
存に努め、村内に桜の苗木を植え、
重機で道を整備してきました。作
業や機械の提供などすべて会員の
奉仕です。

こうした地道な活動が認められ
平成7年に財団法人日本さくら
会より表彰を受けました。

「さくら」の会からの300本を権現
山に植え、2.5キロの遊歩道を整備
した。ホッチョコ山と繋がる歩道

をつくり子どもらが遊べる場所
にする。将来は県南一の桜の名所
にしたい。当面は千五沢地内での、
あぶくま高原道路沿い2キロに桜
を植える予定になっている」
そう語る吉村さんの顔は、満開
の桜のように輝いています。



吉村幸雄

玉川村桜愛好会長
玉川村竹炭木炭生産組合長
南須釜老人クラブ会長
〈南須釜在住〉

自分の感情が能面に移入するような
気がし“面打ち”は奥が深い。



奥野四郎

中老人クラブ会長
玉川村山野草会 顧問
〈中 在住〉

「かれこれ28年前、何か趣味を持ちたいと思っていたところ、須賀川市の公民館事業でおばあちゃん達が木彫りのお面を作っているテレビ番組を見て、自分もやってみたいと思ったのが、面打ちを始めるようになったきっかけです」と語る奥野さんの面打ちは、旧国鉄を定年退職してから本格的になりました。

「分で満足できた作品はまだまだない。作業中の自分の気持ちや面の表情に表れてくる」と、面打ちは奥が深いようです。松や桧などの角材の状態から彫り始め、彫り方が終って磨きをかけた後、7回ほど色付けを重ね、1個のお面が完成するまで1〜2か月ぐらいかかる根気のいる作業です。

「お面を売ってほしい、と言われるが、欲しい人には贈呈している」その数は90個以上。喜んでもらえることが一番うれしいという。

平成12年11月に行われた玉川第一小学校3年生による、面打ち体験学習での児童達の感想文を、奥野さんは“心の宝物”として大切に保存しています。

平成15年12月、72歳の時には玉川村公民館で個展が開催され、260人からの参観者がありました。

中老人クラブ会長でもある奥野さんは、玉川村山野草会員でもあり「面は年間7個作るのが精一杯」と言いつつも、体力の限り作り続け、日本古来の伝統文化を伝えたいと、益々意気軒昂です。

銀翼の彼方に続く未来への扉 福島空港

開港以来、着々と進化してきた福島空港。

県内における「人と物」両面の流通を

円滑にしながら地方発展の期待を担う

「銀の翼」たちよ。元気に羽ばたき続けることを願っています。



平成5年3月20日、福島県民の期待を担って、那須や安達太良の山々の連なりを西に遠望する、玉川村と須賀川市にまたがる丘陵地に、2千メートル滑走路の第3種空港として福島空港が開港しました。

その後、国内の空港需要の伸び、産業経済等の広域化・国際化など、地方の空港を取り巻く環境が大きく変化するなか、福島空港は首都圏に隣接し、地理的優位性が備わっていることから、平成7年11月、大型航空機の就航が可能な2千5百メートル滑走路への延長工事に着手。平成12年7月には、平行誘導路を含めた全施設が供用開始され、福島空港初のジャンボ・ジェット機の臨時便が飛来しました。

この間、福島空港は、福島県や北関東圏まで含めた空の玄関口として、県民生活の向上や産業経済の活性化などに大きく貢献し、空港の利用者数も堅調に推移。念願であった福島空港の国際化も、平成11年6月に、中国・上海便と韓国・ソウル便の2つの国際定期路線が開設されました。

平成20年12月末現在での空港利用者数は、延べ918万人となっています。また、福島空港の利用を円滑にするために東北自動車道と磐越自動車道を結ぶ、あぶくま高原自動車道は、全線開通に向けての整備が着々と進められており、空港周辺のアクセス道路も整備が進んでいます。

福島空港は、国際化へのステップを歩み、地域を変革させる起爆剤としての役目も担ってきましたが、最近の世界的な経済情勢等の急変により、一部航空会社の撤退など空港を取り巻く環境は厳しいものとなっていますが、福島空港の美しい銀翼達は、元気に羽ばたいています。

